読書感想文コンクール入賞作品

最優秀賞

『変身』　フランツ・カフカ　著

普通と違うということ

物質化学工学科２年　原田　綾音

ある朝、ザムザは夢から覚めると、自分が巨大な毒虫に変わっていることに気付いた。つい最近までごく普通のセールスマンであった一人の青年は、一匹の化け物へと「変身」した。しかし、このような「変身」を遂げたのは、彼の容姿だけではない。彼の家族の、彼に対する態度も、以前とは打って変わって、酷く冷たいものへと「変身」してしまったのである。家族からも見放されたザムザは、孤独に死んでいく。その亡骸は、手伝いの婆さんによって片付けられ、家族は晴れ晴れとした気持ちで出掛けるのだった。

この物語の中でザムザは巨大な毒虫、つまり、普通の人とは違う存在として描かれている。ザムザは元々セールスマンで、普通の人であった。普通の存在ではなくなった瞬間、社会から孤立し、家族からも見放されるようになってしまった。私はザムザを哀れに思った。一方で、もし私が彼の家族と同じ立場になったらと考えたとき、私は彼を哀れむどころか、彼の家族と同じような態度をとってしまうだろうとも思った。普通ではないザムザのような存在を受け入れることで、わたしも社会から孤立してしまうのが恐いからだ。社会から孤立し、誰からも見放された先に待っているのは、ザムザのような孤独死である。彼の家族も、同じような恐怖を感じたのだろう。

そこで私は思った。人は社会から孤立することが恐いので、普通であることを望むのだろう、と。もちろん、普通であることより目立つ方が好きだという人も、世の中にはたくさんいるだろう。でも、その目立つ方が好きというのは、あくまでも常識の範囲内で、周りと極端に違いすぎない程度で、集団の中では少し変わっている方でありたいということではないだろうか。結局人は、社会から孤立しないように、目立ちすぎないよう周りに合わせながら生きているのだと思う。私もそうだ。自分ではNOだと思うことも、周りの雰囲気に飲まれ、YESと言ってしまうことがある。でもこのようにして生きていくと、人としての個性がなくなる。まさに、アイデンティティが失われていくのだ。自分でも本当の自分を見失い、自分自身が他人のように感じる。私はこの物語を読んで、自分の個性が失われつつあることに気付かされた。哀れむべきは、普通ではないザムザではなく、普通であろうとし、必死に周りに合わせて、人としての個性を失っている自分だったのである。

虫になったザムザは、普通ではない。でも、個性を持った存在だと言い換えることもできる。周りとは明らかに違う、自分らしさを持っている。彼の家族や私のような、普通であることを望んでいる人は、社会から孤立することへの恐怖で、彼のような個性を持つ存在を見放してしまう。でも、もしかしたらその恐怖の中には、確立した個性を持つ彼への羨望もあるのかもしれない。

周りに合わせるようにして生きてきた私は、本来の自分が何なのか、今ではよく分からなくなっている。だからこそ、私はもう一度自分らしさについて考えたいと思う。個性を持つことに対しての恐怖は、まだある。個性を持つことは、普通とは違う存在であることを意味するからだ。でも、一人の人間として、個性は失わないでいたい。自分しか持っていない個性を見つけ、大事にしていこうと思う。

優秀賞

『夢をかなえるゾウ』　水野敬也　著

ガネーシャの考え方

電気工学科１年　石原　春捺

私は、高等専門学校への入学を機に親元を離れて、寮での生活を始めました。これまでは親から勉強の仕方や日常生活で必要な知識などを教わる機会がありましたが、離れて生活すると自分が何も出来ないことを痛感しました。

自分自身を変えるためにはどうしたらよいだろうかと考えるようになり、インスタグラムなどでよく紹介されている「夢をかなえるゾウ」を読むことにしました。

この本は、平凡なサラリーマンである主人公が、あるときインド旅行みやげで買った神様の置物と同じ形をしたガネーシャと出会い、そのガネーシャが出す課題をこなすことで人生を変えていこうとする物語です。

主人公は、人生や自分自身を変えたいと思い、自己啓発本を読んだり、一人旅をしたりしていましたが、長続きせず、終わっていました。そんな主人公が先輩に誘われたパーティーで成功者と自分の差を目の当たりにして、悔しい思いをしました。そんな自分を変えたいと思った次の日に、主人公の部屋にガネーシャが現れ、ガネーシャからの課題を毎日一つずつこなしながら、人生を変えるために必要なことを学んでいきます。

私はガネーシャから出題される課題２９個について読んだときには当たり前のことだと感じていましたが、実際に今の自分を振り返った時には５個も出来ていませんでした。ガネーシャの教えには、トイレを掃除する、まっすぐ帰宅するなどありますが、実家にいたときにはトイレの掃除をしたことがなく、すべて両親がしていました。学校の帰り道も友達と話をしたりして、寄り道をしながら帰宅する日々でした。

夏休みの期間、学生寮が閉まることから、札幌に１か月半戻ることになりました。夏休み前に小指を骨折してしまい、ひとりで移動することが困難な状況になりました。そのようななか、岡山の祖父母が奈良まで迎えに来てくれ、最寄りの空港まで送ってくれました。両親も新千歳空港まで迎えに来てくれましたが、送迎は当たり前のことに思っていたことから感謝の気持ちを伝えることはありませんでした。ガネーシャは、

> 「人間ちゅうのは不思議な生き物でな。自分にとってどうでもええ人には気い遣いよるくせに、一番お世話になった人や一番自分を好きでいてくれる人、つまり、自分にとって一番大切な人を一番ぞんざいに扱うんや。例えば、・・・親や」

と言っています。言われてみると当たり前のように優しくしてくれる両親や祖父母に甘えて大切にしてこなかったように感じました。ガネーシャは身近にいる一番大切な人を喜ばせることの大切さを伝えています。

９月に家族で函館に旅行した際に、旧函館区公会堂でハイカラ衣装を着る機会がありました。普段両親が写真を撮る際には、子供の頃と違い、無愛想な感じで応じていましたが、今回は、本を読み、両親を喜ばせるために、一番の笑顔で写真撮影に臨むことにしました。両親の笑顔を見た時に自分も幸せな気持ちになりました。

ガネーシャの課題を通じて、人を幸せにすること、行動すること。この二つをしっかりと行うことで成功した人生を送れるようになれると感じました。本を読んで終わりにならないように、ガネーシャの課題を意識しながら学校生活を送っていきたいです。

『片眼の猿』　道尾秀介　著

個性の捉え方

電気工学科１年　稲冨　里咲

私がこの本を読もうとしたきっかけは以前同じ著者が書いていた「向日葵の咲かない夏」という本を読んだことがあったからです。その作品は、今まで自分が読んできた中でもトップクラスに印象に残ったもので普段同じ本を繰り返し読まない私でも何回も読む程でした。著者の道尾秀介さんは物語の中に徐々に引きこむような文の書き方をしていて、いい意味で裏切られます。またタイトルの印象の強さも読もうとしたきっかけです。

この物語は盗聴専門の探偵である主人公が同業者の女性をスカウトするところから始まります。主人公が依頼を受けていた楽器メーカーのライバル社で殺人事件が起こりそれをきっかけに主人公の過去、登場人物の違和感など様々なことが分かっていくお話です。

私がこの本を読んで一番印象に残った点は、この本のタイトルである「片眼の猿」についての話がでてきたところです。「片眼の猿」はヨーロッパの民話で、ある猿の国では顔に左眼だけしかありませんでした。しかしある時一匹だけ両眼がある猿が生まれてきました。その猿は国中の仲間に笑われついに自分の右眼をつぶし、他の猿と同化してしまったというお話です。この物語を話しているときに放った主人公の言葉がとても心に残りました。それは「俺はこう思うんだ。猿がつぶしたのは、そいつの自尊心だったんじゃないかって」という言葉と、「自尊心を失くしてしまったら、いずれ心はずぶずぶに腐ってしまう。そしてそんな心は決まって、悩みの解決を、ある安易な方向に求めてしまう」という言葉です。なぜ私がこの言葉を見て心に残ったかというと昨今SNSの普及により猿でいう右眼、人間で言う個性のようなものが失われてきているように私は感じているからです。SNSが悪いわけではありませんが普及したことにより少なからず画面上に映る人になろうとし、自分の個性を悪だと思い込んでいる人はいると思います。私はこの二つの言葉はそんな人たちに向けたメッセージなのではないかと考えました。個性は生まれてきた時にもらう一つ目の宝物で、それを無くしてしまえば、自分を失う一歩になり得るというメッセージです。周りと違ってもそれを持つ者にしかできないことはたくさんある、自信を無くしたとしても簡単に命を落とそうとせず、自分の強みを考え生き抜いていこうと著者は言いたいのではないでしょうか。現に、主人公は事故で両耳を失っていますし、女の人は一重でいじめにあっていたという過去を持っています。他にも両足を失っている人や鼻を失っている人など様々な人が登場人物として登場します。ですが、全員自分の個性としてそれを受け入れていて自信に満ち溢れています。そんな主人公達を見て私は勇気を貰いました。

私はこの本を読み自分ではいいと思っていない個性でも、それを武器にして強くなれるということを学びました。私は今までコンプレックスを悪いものだと考えていましたが、それと向き合っていくのも良いかなと思えるようになり、世界が広くなったように感じます。皆さんが個性をどのように考えているか分かりません。ですが、それに対し新しい考え方をしてみても良いのではないでしょうか。

『母性』　湊かなえ　著

求めた無償の愛―「母性」を読んで―

物質化学工学科１年　奥村　美月

私は、11月23日に公開される映画「母性」の原作を読んだ。この物語は母と娘の２つの視点で主に進行していくが、この二人の物事のとらえ方が最大の魅力だと感じた。この親子は同じ出来事を語っているのにもかかわらず全く違う語り方をするのだ。その中で、私が特に面白いと思ったところを紹介しようと思う。

それは、この小説の解説としても取り上げられているが、母が表現した娘の表情とその時の娘の心情のくい違いである。母は娘の表情を仏頂面と表現したのに対し、娘はこの時母を心配させないようにと涙をこらえているのである。このシーンは妊娠中の母に代わり家事を行う娘を母が褒めているところで、娘は自分が行う家事に対し、祖母と叔母に文句を言われ辛い思いをする中で、母にかけられた優しい言葉に涙をこらえているのだが、母は褒めるという愛を娘に与えているのにそれを受け取ってもらえないという感情に陥ったのである。この出来事は２人のくい違いのほんの一部でこのような出来事が何度も重なることで母は娘に愛が伝わっていないと勘違いしていた。しかし、また娘の愛も母には伝わっていなかったのだ。娘が母に喜んでもらうために行った愛ある行動はすべて母にとって悪い出来事のきっかけとなっていたのだ。流産をはじめ、友との別れなど母にとって娘の愛は邪魔なものとして扱われ、愛として伝わらなかった。そうしてお互いに愛を受け取ることができずに年月を過ごしてしまうのだ。

では、この二人が求める愛とは何だったのか、それは母の実の母、つまり娘の母方の祖母が与えてくれていたものだった。

祖母は娘に、そして孫にどんな愛を与えていたのか。それはごく普通のものだった。娘には誉め言葉を与え、良いことをすると大人になってからも頭を優しくなでた。孫にも同様に誉め言葉を与え、体に触れることでぬくもりを与えていた。これを孫は「無償の愛」と呼んでいた。しかし、この愛を与えてくれた祖母はすぐに亡くなってしまった。では、祖母が与える「無償の愛」と母の愛は何が違ったのか、これは私の解釈にすぎないが母の愛には愛よりも先にその目的があったのではないかと思う。「～のために。」「～と思われないように。」と。娘は祖母の愛について「あなたがいるだけでいい」と思わせるとも表現していた。おそらく母の愛よりも前にある目的が無償の愛を消してしまい、自分がいることに対し理由を求められているように感じ、無償の愛と感じられなかったのではないだろうか。

ところで、ここまでは母と娘の「愛」について感想を述べたが、最後にここで物語の題名でもある「母性」について感じたことを書こうと思う。この物語を読んだ最大の理由がこの「母性」について知りたかったからなのだ。

作中で母性とは「自分が求めたものを我が子にも捧げたいと思う気持ち」と表されている。物語の中では確かにこれが成り立つと感じたが、今一度自分の思う母性について考えたとき、真逆の考えが浮かんだ。母性とは「母から受けた愛を娘に与える」ということではないかと。私の母は優しさと厳しさを平等に与えてくれる人だった。祖母を見ても同じことを感じる。物語中の母もこれをしようとしたのではないかと思う。しかし伝え方を間違えて、うまく伝わらなかったのだろう。私の母は先日亡くなりもう二度と母性を受け取ることはないが私に娘ができたら母から与えられた母性を娘に上手く与えようと強く思った。